第 15 章：マリス（麻美視点）

次の日。学校が休みだったため、4 人は学校に隣接する海に来ていた。そこへ…

結菜：「あ、リーシャも来てたんだね。ちょうど良かった。暑さでちょっと気分が悪くなったから日陰までついてきてくれない？😏」

麻美 in リーシャ：「大丈夫？水樹さん、私が連れて行ってあげるから少し休んで…」

私は水樹結菜の手を取ると日陰に連れていき、木陰に座らせた。

結菜：「ありがとう、リーシャ、いえ麻美先生…」

私はその意外な言葉に驚いた。

結菜：「ふふ…あたしの言う通りにしてね。麻美先生。」

水樹は私の前でそう言うと、不意に男の子が現れ、私の唇にキスをしてきた…3 人はその様子を見ていて止めようと近づいてきたが、間に合わず私はそれを受け入れてしまった。濃厚なキスで私の感覚がマヒしてくる。

結菜：「成功したようね。」

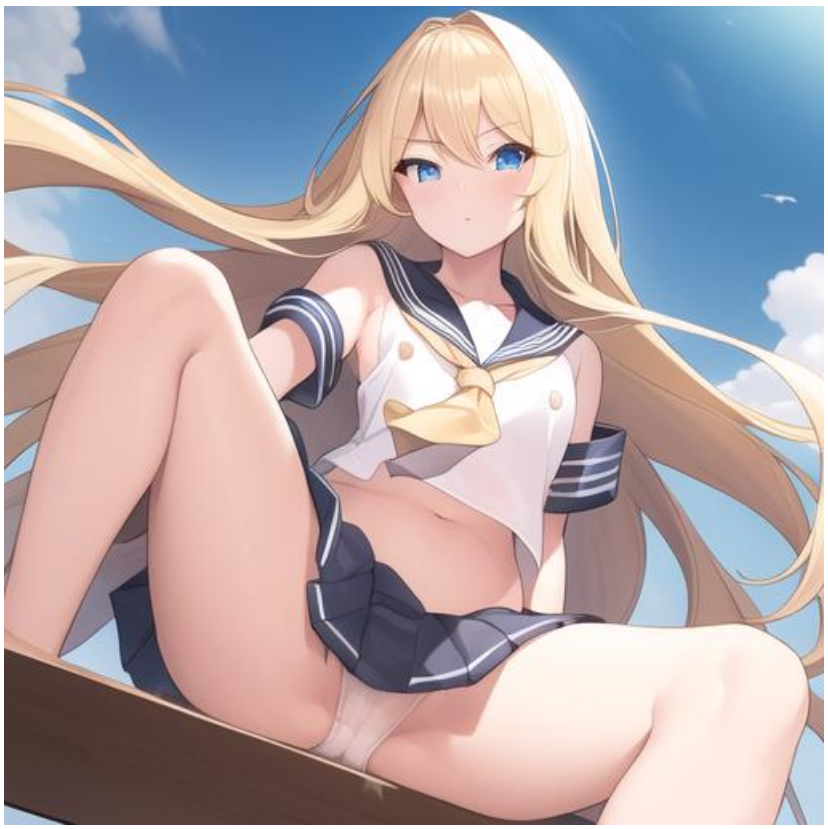
3 人は木陰に到着し、男に詰め寄る。結菜は立ち上がり 3 人を迎える。

ヒロ in 麻美：「お前、麻美先生に何するんだ？」

男は驚いた表情できょとんとしている。

リーシャ in 凛：「麻美先生、大丈夫ですか❓」

麻美？in リーシャは、その言葉を無視し、大股開きで階段になっている木の板に座った。スカートがまくれ、ショーツが見えているが、全然気にする様子がない。



その表情は冷たく、3人を見下している。
？？in リーシャ：「お前たちのことは知っている。俺もお前たちと同じように他人とカラダを入れ替えることができるんだ！」
凛 in ヒロ：「え…入れ替えって…リーシャのカラダにいるのは麻美先生じゃないってこと❓」
？？in リーシャ：「そうだ。俺とカラダを入れ替えたから今は俺になっている。」
麻美 in？？：「みんな、私が麻美よ。気付いたらあたしと、リーシャさんのカラダをしたその人とカラダが入れ替わっていたのよ。」

第16章：チェイス
リーシャ in 凛：「結菜はもう体調大丈夫なの？」
？？in 結菜：「ふふ…もう結菜のフリをする必要もないか😏」
凛 in ヒロ：「結菜…どうしちゃったの❓」
リーシャ in 凛：「結菜のフリって、結菜も誰かと入れ替えられてるってこと❓」
？？in 結菜：「その通り。俺は今日から水樹結菜として生きる！」
そう話す結菜に入っている男は、結菜が普段見せない邪悪な表情をして結菜の肉体を4人に見せつけた。それはまるで堕天使のような禁断の果実のような魅力があった。
ヒロ in 麻美：「何故だ！お前ら男だろ？」
？？in リーシャ：「お前らに言う必要はない…」
ヒロ in 麻美：「2人を元に戻せ！！」
ヒロ in 麻美がリーシャに突っ込んでいく…しかし、慣れない肉体で砂に足をとられバランスを崩し倒れかかった。そして、凛 in ヒロとリーシャ in 凛につっこんでいき3人は、砂浜をゴロゴロ転がって意識を失った。
？？in 結菜：「邪魔者はいなくなったか。じゃあ行くぞ、うジャ。」
うジャ in リーシャ：「ああ…」
2人はその場を去った。ほどなく3人も意識を取り戻した。そして自分たちのカラダを確認すると、自分たちのカラダが入れ替わっていることに気づいた…がもう慣れたようですぐに2人を追い掛けた。
ヒロ in 凛：「俺は凛になったか。」
凛 in 麻美：「うん。今はあたしらしくしなくていいから全力で追いかけましょう！」
リーシャ in ヒロ：「あたしはヒロね。このカラダなら二人より早く走れるはずだから、二人を見失わないように先にいくね。」
2人は学校敷地内に戻ると、今は使われていない小屋の中に入った。リーシャ in ヒロが先行して追いかけ、残りの2人もそれに続き小屋の玄関まで入ってきた。
？？in 結菜：「それ以上入るな❣」
3人はそこで驚きの光景を目にした。

第 17 章：テンプテーション（麻美視点）

うジャ in リーシャは、服を脱ぎ、横になっている麻美 in うジャの股間を優しく撫でると、その大きな胸を私のカラダに押し付けていた。その表情は妖艶で男がその肉体に乗り移っているなんて誰も思わない。そんなうジャ in リーシャの色っぽい表情を見ていると、私の胸がときめき、股間が熱くなってくる。

麻美 in うジャ：「やんっ💕」

うジャ in リーシャ：「どうだ…気持ちいだろう？我慢せず逝っていいんだぞ？」

ヒロ in 凛：「逝っちゃダメだ、麻美先生！」

うジャ in リーシャは私のズボンのチャックを開けると、おちん〇んを取り出し、そのしなやかな手で優しく包み込んだ…

麻美 in うジャ：「わかってる…でもカラダが勝手に反応しちゃって…気持ちいいの💕」

？？in 結菜：「そうだろう？そしてそのカラダで逝ったら…二度と元に戻らない！」

凛 in 麻美：「麻美先生、頑張って！女の子の方が楽しいって思い出して💡」

うジャ in リーシャの手はゆっくりと、うジャの男の、今ではあたしのモノとなったおちん〇んに刺激を与える。あたしのおちん〇んは今ではうジャ in リーシャの手に収まらないほど大きくなっている。

うジャ in リーシャ：「俺でもそこまで大きくはできなかった。お前は俺以上にそのカラダを使いこなしているよ。」
リーシャ in ヒロ：「麻美先生！あたしとのガールズトークを、触れ合いを思い出して！男になったらあんなことできなくなっちゃうんだよ！！」
麻美 in うジャ：「ああ…ダメ…私のカラダじゃないのに…私の、リーシャさんのカラダよりも感じる…男のカラダ、気持ち良すぎる！！」
？？in 結菜：「よし！もう少しだ！」
うジャ in リーシャ：「そんなに快感を感じるカラダが今からお前のモノになるんだ…男となった麻美先生はこの誘惑に耐えられない！」

第 18 章：エンチャット（麻美視点）

うジャ in リーシャの攻めが続き、その指が私のアナルに到達した。そして優しく挿入されていく…指は奥まで進むとぷにぷにのモノにこつんと当たった。懐かしいこの感覚…あたしのおちん〇んから透明な液体が噴き出す…？？in 結菜も加わり、私は 2 人に弄ばれ、胸、おしり、股間の 3 箇所から快感を感じている。そしてついに…

麻美 in？？：「ああ…もう元のカラダはどうでもいい…私は、私はこのカラダに、この男の子になりたい💕はあああああんっっ💕」

麻美 in？？は大きく肉体をのけ反らせ果てた…絶望する 3 人…対して悦ぶ 2 人。

麻美 in うジャ：「…逝ったことで、さっきまであったこのカラダへの違和感や嫌悪感がなくなったわ。いいカラダね💕本当にあたしがもらっていいの？」
？？in リーシャ：「気に入ってもらえて良かったよ。そのカラダはもう麻美先生のモノだ。」
麻美 in？？：「うふっ💕うジャって言われてたわね。今日から私がうジャなんだけど…ところで…何だか胸が落ち着かないの…そのブラジャー着けてもいい？」
うジャ in リーシャ：「好きにしていい。」
　私はうジャ in リーシャのつけていたブラジャーを受け取り、すかさずそれを身に着けた。
麻美 in？？：「やっぱりこれがないとね！あ、あなたのカラダ、あたしが気持ち良くさせてあげよっか？まだ、女の子の気持ち良いところわかってないでしょ？」
うジャ in リーシャ：「ああ、でも…」
　うジャ in リーシャは、玄関に近づき、ヒロ in 凜の前で止まると…

うジャ in リーシャ：「定住するならお前がいい…」
　ヒロ in 凜はとっさに外に出て逃げ出したが、うジャ in リーシャにつかまり唇を接触させてきた。うジャ in リーシャからねっとりとしたものがヒロ in 凜の口に注がれる。と同時にヒロ in 凜の口の中にあったそれはうジャ in リーシャに吸われていった。
　入れ替わる二人…

第19章：フォーリング（ヒロ視点）

再び目を開けたうジャin凛は自分のカラダを確認するように見渡した。

うジャin凛：「成功したようだな…」

凛in麻美：「今度はあたしのカラダに乗り移ったの～🤡」

麻美inうジャ：「神宮司さんの方がいいのね。私は…あなたの、いえ…私の大きくなったおちん〇んを納めれるならどっちでもいいけど。さあ一緒に逝きましょ😍」

俺は麻美先生の変貌と入れ替えられたダブルショックで虚ろな表情で呆然としていた。そんな俺に？？in結菜は暗示を掛けてきた。

？？in結菜：「思い出せ…お前はリーシャだ…」

？？in結菜はポケットから鏡を取り出し俺に見せた。鏡に映るリーシャの姿。

ヒロinリーシャ：「俺は…リーシャ…」

俺の喉を震わせて発する高く愛らしい声は間違いなくリーシャの声だ。そしていつも俺に勇気を与え癒してくれる声が俺自身の耳に伝わってくる。

？？in結菜：「そうだ…女の子だ！」

？？in結菜は、俺のリーシャの髪に触れる。髪の毛が発する花の香りが俺の鼻に届き俺は幸福感に包まれる…

ヒロinリーシャ：「俺は女の子…」

リーシャinヒロ：「ヒロ、しっかりして❣あたしがリーシャ、あなたはヒロよ！」

その言葉に俺の幸福感は吹き飛び、一瞬不安になった。すかさず？？in 結菜は、俺の、リーシャの胸と股間に触れる。

？？in結菜：「安心しろ、お前は女だ。そのカラダがその証拠だ❣」

ヒロinリーシャ：（ある…ない…良かった💕この感覚…失いたくない❣）

？？in結菜：「女の子が知らない男の前でそんな挑発的な姿をしていいのか？」

ヒロinリーシャ：「ダメ…服を着ないと❣」

俺は顔を赤らめセーラー服を身に着けた。

リーシャinヒロ：「ヒロ、今のあなたは可愛い💕どこからどう見ても女の子よ。あたしのカラダを気に入ってくれてるのもすごく嬉しい❣でも…」

第20章A：パッション1（リーシャ視点）

リーシャinヒロ：「こんなの、ヒロじゃない❣あたしらしくなくていい。男っぽいあたしでいい！ヒロはヒロらしくあたしのカラダを好きに操ってよ～～❣❣」

リーシャinヒロ：（あたしは、あたしのカラダの気持ち良いところを誰よりも知っている。ここを攻めてヒロを逝かせて、ヒロを取り戻すんだ！）

あたしはヒロinリーシャの服の隙間から手を入れ、胸の形を確認すると、円を描くようにその丘をなぞる。ぴくんと反応するヒロinリーシャ。その表情は満ち足りている。次に

あたしは指に力を少し入れ、丘の中央の突起を掴む。カラダを大きくのけ反り，その場に女の子座りをするヒロ in リーシャ。
？？in 結菜：「いいぞ❣逝かせてやれ❣」
リーシャ in ヒロ：「ヒロ…初めての女の子の快感に耐えられず辛いよね…今、あたしが楽にしてあげる！あなたのカラダを使って！！」
　あたしは自分のカラダの一番気持ち良いとこを攻めた。ヒロの快感が最高潮に達した。
ヒロ in リーシャ：「や…あっ…ああん💕」
　ヒロ in リーシャは声を大きく漏らすと、あたしに倒れかかり果てた。あたしはそれを受け止めた。その表情は乙女そのものだった。しばらくしてヒロ in リーシャがあたしの腕の中で目を覚ました。
ヒロ in リーシャ：「あれ？リーシャ、か？俺は一体…」
リーシャ in ヒロ：「良かった❣元に戻ったんだね❣」
ヒロ in リーシャ：「え？いや、俺たちカラダが入れ替わったままだが…それよりいつの間にか落ちてたみたいで…ゴメン…」
リーシャ in ヒロ：「いいのよ❣それよりも麻美先生とうジャを元に戻さないと❣❣」
　あたしはヒロ in リーシャに状況を説明すると、ヒロ in リーシャは徐々に怒りの表情を露わにしていった。髪を振り乱して、拳を構え、大股を開き、その表情はリーシャが今まで見せたことがない鬼のような形相をしている。
ヒロ in リーシャ：「麻美先生の心と凜のカラダを奪ったお前たちを許さない！」

第 20 章 B：パッション（リーシャ視点）

しかし、2 人の前に麻美 in うジャが立ちふさがり、ヒロ in リーシャに強烈な腹パンを入れた。

麻美 in うジャ：「いいところなんだから邪魔しないでね。」

ヒロ in リーシャ：「どうして…麻美…先…」

ヒロ in リーシャは意識を失いゆっくりと砂浜に崩れ落ちた。

うジャ in 凛：「男の腹パンだとそうなるよな…助かったよ。」

そう言うと、うジャ in 凛は、勝ち誇った表情で不敵に笑い、あたしたちを見下した。凛の表情は悪意に満ちていたがどこか色気が溢れている。

麻美 in うジャ：「また邪魔が入らないうちに、あなたの魂を神宮司さんのカラダに定着させた方がいいんじゃない？」

うジャ in 凛：「そうだな…」

あたしたちは信じられないという表情でうジャとなった麻美を見た。そんなあたしたちを気にせず麻美 in うジャは続ける。

麻美 in うジャ：「これで邪魔者はいなくなったわ…続けましょ。ほら…これが女性のおっぱいよ😍男の子とは全然感覚が違うでしょ❓」

うジャ in 凛：「ああ…服の上からでも敏感に感じる…」

麻美 in うジャ：「うジャ君、先ほどまでの男の子の表情から女の表情に変わっているわよ。初めての女の子で、こんなに馴染むなんて…なかなか女の子の才能あるわね❣」

麻美 in うジャはうジャ in 凛の胸を強く、そしてときに優しく揉み上げる。昨日、リーシャが乗り移った凛にもしてあげたことだ。うジャ in は凛の肉体の快感に溺れ、魂が変化し始めていた。

うジャ in 凛：「あ…ああ…女になって良かった…頭が、脳が何も考えられない😍」

麻美 in うジャ：「女の快感はまだこんなものじゃないわよ😋」

麻美 in うジャは凛 in うジャのおしりを揉むと、そのカラダは小刻みに震え始めた。

うジャ in 凛：「カラダがビクビクって痙攣して…自然に喘ぎ声が…😍」

第 21 章：エクスポーズ（麻美視点）

麻美 in うジャ：「さあ、女の快感に溺れなさい！あなたがその快感に耐えられるならね❣」

うジャ in 凛：「ダメ…壊れてしまう、俺、いや、あたし…誰だっけ…😍」

あたしはうジャ in 凛から離れた。

麻美 in うジャ：「うふふっ…耐えられないみたいね。でも、あなたはそのカラダじゃなくても…あなたのカラダで女の子と同じように感じちゃうみたいなの。」

うジャ in 凛：「そんな…はずは…」

麻美 in うジャ：「いえ…さっきあなたに愛撫されてわかったわ。あなたのカラダの感覚は女の子👧あなたは男の子のカラダのままでも女の子の感覚を味わえる…女の子のカラダだとあなたの繊細過ぎる自我は崩壊してしまうわ…男の子のまま女の子になれるならその方がいいわよね？」
うジャ in 凛：「本当に俺は元のカラダに戻ってもこの快感を味わえるのか？」
麻美 in うジャ：「ええ…私が更に感じるようにしてあげたから…何ならもっとこのカラダを感じるように開発してあげてもいいのよ💕」
うジャ in 凛：「麻美先生…俺は男のまま女の子の快感に満たされたいです…」
　うジャ in 凛は涙を流し頷きながら答えた。あたしはそんなうジャ in 凛を抱き寄せ頭を撫でた。
麻美 in うジャ：「よく自分の気持ちを正直に言えたわね。偉いわ。男が女に憧れるのも、女が男に憧れるのも全然変じゃないわ。憧れる人になってみたい。それはステキな願いよ。でもそんな女の子に憧れているあなたが、こんなことをするのは心が痛んでいるはず。あなたは本当は優しい女のコ。」
うジャ in 凛：「麻美先生…これまでのこと、ごめんなさい。元のカラダに戻ります…あ…でも…」
麻美 in うジャ：「大丈夫よ。さっきのあたしは逝った振りをしただけ。直前で我慢したの。」

第 22 章：リソルーション
　うジャと結菜になっていた男から何かが抜け出たが、誰もそれに気づく者はいなかった。抜け出たその 2 つのものは、それぞれ別の場所の上空から地上を見つめている。
うジャ：(今回はここが潮時か…なかなかいいものを見せてもらった。)
？？：(入れ替わりフィールドの設定…まだまだ改良の余地があるな。直接効果を見るのは危険だからここから見させてもらうぞ。)
　うジャと麻美、その男と結菜は肉体を交換して元に戻った。うジャは改心した様子だったが、その男はそれまでのことを何も覚えていなかった。
結菜：「はー、なんかわからないけど…大変だったわ…男になっちゃうなんて…でもたまにはいいかも、男のカラダ😆」
麻美 in 凛：「そう言えば入れ替わったカラダで逝けばそのカラダに定着するっていってたわね。」
うジャ：「はい！ただ条件があって、そのカラダにいたいって強く思う必要があるんです。あと入れ替わるには互いの体液を交換するか、どちらかの魂が空の状態じゃないとダメみたいなんです…」
リーシャ in ヒロ：「それなら今回起こったことも、解決のためにするべきこともわかったわね…謎はすべて解けた！」

ヒロ in リーシャ：「…その情報をどこから仕入れた？」
うジャ：「あいつから…あいつの言う通りにしたら入れ替わることができて…でもなんか今とあのときの雰囲気が全然違っていて、今は何も覚えていないみたいで…」
麻美 in 凛：(…なんかスッキリしないわね…何故こんなことができるのか…何故こんなことをしたのか…)
　これでみんな元通りと思われたとき、凛 in 麻美が驚きの発言をした。
凛 in 麻美：「あのね…あたし…やっぱり…宙敬君のカラダになりたいの😊」
　凛 in 麻美の表情は今までの凛では見たことが揺るぎないものだった。

【Annex】
魂が空の状態での入れ替わり！：ヒロとリーシャの衝突、ヒロ in リーシャの衝突、海での麻美以外の 3 人の衝突
体液交換による入れ替わり💕：麻美とリーシャ in ヒロのキス、ヒロ in 凛とリーシャ in 麻美のコーヒー、凛 in リーシャと麻美 in ヒロのコーヒー、海での麻美 in リーシャとうジャのキス、海でのうジャ in リーシャとヒロ in 凛のキス